



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	図書館ニュース vol.33, no.1
Author(s)	東京学芸大学附属図書館
Citation	
Issue Date	2004-04-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/60015
Publisher	東京学芸大学附属図書館
Rights	

図書館ニュース

Vol. 33, No. 1 (2004. 4)



大学の顔としての図書館

細江文利

いよいよ大学は、これまでに経験したことのない全く新しい国立大学法人としての状況を迎えることになる。これからの国立大学は、競争的環境の中で個性的な大学づくりが求められ、その意味で新入生の皆さんとは、大学とともに質の高い大学の創出に向け、協働の第一歩を歩むことになる。

さてここでいくつかの大学のホームページを開いてみることにしよう。トップページの項目のレイアウトはどうなっているであろうか。因みに学芸大学の場合は、総合案内等の案内情報にはじまって、教育学部、大学院の組織、教官紹介等につき、図書館の項目が取り上げられている。一般にはこの扱いが多い。いっぽう、電気通信大学では、お知らせ情報に続いて、附属図書館が2番目に位置付けられている。また、同志社大学や大阪市立大学でも、前段にそれぞれ総合情報センター、学術情報センターの見出しで図書館が取り上げられている。要する

に、ホームページで、大学の図書館に対するプライオリティを読みとることができる。

例えば大阪市立大学の場合、学術情報総合センターとは、「進展する高度情報化社会、地球規模に拡張する都市環境にあつて、実学を礎とする大阪市立大学がめざす開かれた都市型総合大学の中核機能を担うのが学術情報総合センター。日本有数の規模を誇る附属図書館と計算センターを統合した『図書と情報の館』であり学内諸施設とネットワークするキャンパスLANを基軸に国内外の学術機関とインターネットで結ぶ創造性豊かな学習と研究の場でもある最先端情報拠点。さらにそれらを地球社会にも開放する。まさに拡張する『学宇宙』と呼ぶにふさわしいグローバルな学術・文化交流のアカデミーサテライト、21世紀を拓く『パーク・ユニバーシティ構想』の第一段階の実現。」とある。

また、同志社大学の総合情報センターは、「1875

目次

大学の顔としての図書館（細江文利）	1
蔵書にとらわれるな - 頭の中の方が広い - （及川英二郎）	3
本との出会い：学生時代に会った一冊の専門書（遠藤徹）	5
学び いま・むかし - 望月文庫コレクション紹介 - : 言葉のリズムと往来物（丹和浩）	6
平成15年度資料展示会・講演会報告	7
Bibliofile 43：資料探しの基本ツール“学芸大OPAC”を活用しよう！	9
お役立ち情報	10
お知らせコーナー	11

年、新島襄は同志社創立の当初より、教員生徒に自らの蔵書を公開し貸出を認めました。同志社大学図書館はここに端を発し、(中略)情報化時代のニーズに応えるべく、図書館、計算機センター、視聴覚室を統合し、1991年に学術情報センターが発足し、2001年には事務システム環境を含めた総合情報センターとして新たなスタートを切りました。(中略)図書館、コンピュータ、マルチメディア、ネットワーク、これらが一人でも多くの方に、存分に活用され、研究や学習の成果の一助となることを願ってやみません。」と、センターの機能を表現している。図書館がまさに大学の顔になっているといえようか。

ところで正直の所、図書館というと昭和20年代生まれの私などは、古い蔵書や分厚い本がいっぱい詰まっている場所というイメージをもってしまふ。即、街の公共図書館のイメージである。しかし、今図書館の役割は「保存」から「サービス」の機能に変わってきているといわれている。

もちろん貴重な文献や資料の保存役割を否定しているわけではないであろうが、今図書館の課題は、利用者にどのような情報を提供したらよいか、あるいは人の数ほど発信があるといわれている中で、利用者が求める情報を適切に選択し、如何に速やかにそれを提供することができるか等、「サービスのあり方」に眼が向けられているようである。

また、本と読者の関係一つを見ても、本は「買う」時代から「借りる」時代にあるともいわれている。それは、住宅環境の狭隘化の問題もあるが、何よりも情報量の増大、情報の変化の速さ、課題解決に必要とされる情報の質の高さ等に適応せざるをえない、現代人の小さな知恵といえるかもしれない。

さて、一般に図書館では情報化の波は大きく、運営・管理業務のコンピュータ化を始め、データベースの作成、電子出版やオンライン・データベースの導入など広範にわたっている。それは情報の伝達方法が、「紙の世界」から「電子の世界」へ転換してきていることを意味している。

また、小・中・高等学校等の教育機関においても、研究情報基盤整備が急速に進んでおり、コンピュータを駆使した授業実践が話題を呼んでいる。

こうした進展を予測すると、近い将来大学では、学内における学術情報、教育実践研究情報、点検評価・業績評価情報そして学務の情報、入試の情報、および図書館業務等の機能がモジュール式に一元化され、さらには、学内諸施設及び附属学校とネットワークするキャンパスLANを基軸に国内外の学術情

報がインターネットで結ばれ、図書館・センターが情報処理・情報創造サービスの中心的役割の演じ手として期待されるようになるであろう。

となると、学生にとっては、レポートや論文作成のための図書館情報や学術情報を、さらには授業の情報や学務の手続きをPCで居ながらにしてアクセスできるようになる。また、質の高い教員養成をめざす本大学としては、図書館を中心に、学校現場や国際的な視野に立った豊富な教育実践研究情報を蓄積でき、東京学芸大学ならではの顔かたちを鮮明にすることができる。

このように考えると、図書館はこれまでとは異なった情報活動が求められることになる。

とは言え、図書館本来のサービスが疎かになってはならない。学生が求める本や情報がいっぱい詰まっていることは基本である。図書館図書購入費は、教育・研究経費の13.6%が配分される。電子ジャーナルの整備やとりわけ学芸大学においては教育実践研究に関するデータベースの整備が急務である。法人になると予算のやりくりがかなり弾力的になる。大学は、図書館が大学の顔となるように情報関連に予算を充当し、図書館の質や機能を高め、大学が創造性豊かな学習と研究の場となるように努力しなければならない。これからの教育は、知識・技術の量の獲得だけではなく、それらを習得する過程、すなわち自分で調べ、自分で読み取り、自分で考えることが大切になってくる。このことを合わせ考えると、読書や自らによる資料収集の必要性が浮き彫りになってくる。図書館は、こうした新しい教育の考え方と歩調を合わせ、豊かな大学文化の担い手となることが求められよう。

(ほそえ・ふみとし 附属図書館長)





蔵書にとらわれるな - 頭の中の方が広い -

及川英二郎

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。あの、花粉の忌まわしい「歓迎」さえなければ、さぞかしもっと楽しかったにちがいないこの季節。おかげさまで、あまり羽目はずさずにすむことを花粉に感謝しながら、いっそのこと図書館で一日のんびり過ごすのも一興です。キャンパスライフに欠かせないスポットとして、自分なりに図書館の利用法や居場所を、今のうちにはやく確立しておくことを、まずはお勧めいたします。

ところで、みなさんにとって、図書館のイメージとはどのようなものでしょうか。ぼくのように、子供のころから親に「本を読まないヤツはダメなヤツだ」とすりこまれ、トラウマ的な重圧感を覚えてきた劣等生にとっては、「知識の宝庫」とか「ひろがる世界」などと素直には受け取れない。むしろ、ケムたさを感じずる対象でしかありませんでした。もちろん、本をこよなく愛せる幸運な人にとっては、ただひたすら長居したくなる、そんな安らぎの空間にほかならないでしょう。本に対する知人の「熱い思い」に触れるたびに、人によって読書観がこんなにも違うものなのかと再認識すると同時に、我が親の子育てのまずさを改めて実感する昨今です。

いずれにしても、図書館には沢山の本がある。それを「安らぎ」と感ずるか「重圧」と感ずるかは別として、たしかに、この素朴な事実には間違いはありません。図書館に本がなくなってしまったらどうなるか。それはさながら、論のない論文、学のない大学、教える気のない教員、牛井のない牛井屋さん、慎みのない都知事等々。かなり深刻な事態といわなくてはならないでしょう。

しかし、本の読み方が一様ではありえないのと同様、図書館にも多様な利用法があってよいはずです。図書館の堅いイメージを少しでも緩和したい。これは、ぼくのようなトラウマ人間のささやかな願いです。

その点、ここで1つ申し上げておきたいのが、「蔵書にとらわれるな」ということです。発想を少し、切り換えてみてください。

例えば、図書館の書棚から、読みたい本を選び、それを読む。このオーソドックスな利用法は、たしかに図書館での過ごし方としては、欠かせないオプ

ションの1つです。そして、そうした利用法からは当然、図書館には蔵書があればあるほどありがたい、選ぶ範囲が広いほどよい。そうした要求が出てくるのも、うなずけるところです。しかし、みなさんの関心や思考は、図書館の蔵書などといったチンケなものに拘束されるべきものではありません。所詮、図書館の蔵書は、誰かが集めてきたものでしかないのですから。むしろ、その誰かが有能であり、しかも多数であればあるほど、蔵書内容は多様になります。また、図書館の分類法などは、図書を網羅的に管理するための技術ですから、図書館の蔵書はたしかに、広範囲な関心をカバーすべきものであることは言うまでもありません。でも、個々人の関心の「広がり」や「深まり」、思考の「道筋」や「行方」は、なんびとも予測できませんし、満たすことはできない。否、「満たされてたまるものか!」。この点は、大学に入りたいま、是非とも確認しておいていただきたいポイントです。夏目漱石の『三四郎』に、こんな一節があります。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」(新潮文庫版 21 頁)

これは、大学に入学する三四郎が、熊本から東京に向かう車中で、同席した「髭の男」に話しかけられている場面です。先日、この『三四郎』を読み返している連れ合いに、「日本より広いのは何か」と問われ、迷わず「世界」と返答したぼくは、漱石の用意したセリフを聞いて、自らの凡庸さを痛感しました。「髭の男」は、そんな野暮ったいことは言いません。

「日本より頭の中の方が広いでしょう」
「囚われちゃ駄目だ」

熊本より東京が広いかどうかは別として、たしかに「頭の中」は、他人がお膳立てしたルールや環境に、行儀よく収まるようなものではありません。

こうした立場から見ると、今そこにある図書館の蔵書がどのようなもので、どのくらいの冊数があるかなどといったことは、大した問題ではなく

なっけてきます。戦後発行された単行本を網羅し、日本最大の蔵書数を誇るあの国会図書館ですら、全てがカバーされているわけではないですし、単独では実に物足りない存在でしかありません。

重要なことはむしろ、そこにある図書館が、図書館と図書館をつなぐ巨大なネットワークの交点にほかならないということです。附属図書館のホームページを開いてみてください。いまや図書や雑誌の検索システムは、本学所蔵のものだけでなく（OPAC）、全国の大学や公共図書館までも網羅し（Webcat）、人名やキーワードを入れれば、雑誌に掲載された関連論文を即座にリストアップしてくれる機能もついています（雑誌記事検索）。また、必要とあらば、1Fのレファレンスデスクで書籍を取り寄せたりコピーを送ってもらうこともできますし、図書館の人に訊けば、テーマによって何を調べたら良いかを適切にアドバイスしてくれるのです。

そして、重要なことは、こうした機能を生かすも殺すも、それを利用するみなさんの発想如何だということです。発想は、書棚の前に立っていれば自然と湧いてくるようなシロモノではありません。日常的に感ずる小さな「疑問」や「怒り」。そうしたものから、手さぐりでたぐり寄せられてくるものなのです。

ですから、みなさんにはこの機会に是非とも、受験勉強ですり減らした感性をみがきなおい、そうした小さな「疑問」や「怒り」を大切に育てて行ってほしいと思います。そして、それを拠点に思考を積

み上げ、言葉として成形していくトレーニングを積んでいくのです。先輩や教員の手前、「疑問」を恥ずかしくて押し殺す必要は毛頭ありません。大学は、知らないことを恥ずかしかるよりも、「疑問」をもてないことを恥ずかしかるべきところなのです。知らないことは、調べればよいだけのことなのですから。逆に、知識の豊富さで武装し安住している人には、その知識の豊富さに敬意を表するよりも、その知識ゆえに納得しきっている思考の退屈さを哀れむべきでしょう。発想の豊かさは、知識の豊かさとは別次元の問題なのです。

ともあれ、「頭の中」は、図書館の蔵書ごときに圧倒されるほど狭量なものではない。そんな感覚で、図書館を眺めなおしてみてください。きっと、思っていたのとはちがう相貌を見せてくれるにちがいありません。

（おいかわ・えいじろう 歴史学研究室助教授）



共通科目のための読書案内 を発行しました！

附属図書館では、今年度も『共通科目のための読書案内』を発行しました。

履修する共通科目の手引きとして、シラバスと併せて使用いただくだけでなく、みなさんの読書生活のガイドブックとしても活用ください。なお、掲載されている図書は附属図書館にほぼ全て備え付けられています。

ホームページから利用することもできます。

URL <http://library.u-gakugei.ac.jp/lbhome/dokusho/dokushoindex.html>





学生時代に出会った一冊の専門書

遠藤 徹

私はどちらかというと乱読で、常に何か本を手にかけていることが多く、これまでに様々な本と出会ってきたように思うが、その中でも影響の濃淡は自ずとある。ここでは、一冊の専門書との出会いについて述べたい。今から17、8年前、私がまだ学部1、2年次の頃のことであるが、大阪梅田のとある古書店で、たまたま目にした林屋辰三郎著『中世芸能史の研究』という本がそれである。当時まだ専門分野は定まっていなかったが、文学部に所属し、漠然と日本史を専攻し日本音楽史や芸能史を研究したいと思っていた私は、書名から今後の自分の研究に大いに関わるのではないかと直感した。著者の住まいが私の下宿の近所であり、お名前を以前から知っていたことも親しみを感じた一因であった。たしか5,000円だったと思うが、当時としてはかなり思いきって買ってみた。自分で購入した最初の専門書である。

帰宅後、早速読んでみたのだが、まだ専門の勉強を何もしていない頃であり、重厚な専門書（あとから知ったことであるが本書は著者の博士論文であった）に大変に苦労した。どうにか半分くらいは読み進めてみたのだが、結局内容はさっぱり理解できないまま挫折してしまった。しかし中途までとは言え、分からないままにも格闘したことから、二つのことを悟った。一つはこの著作が非常に優れた研究書であり、容易に乗り越えることができるものではないということ、今一つは、そうは言っても、この著作の方法論からは自分が本当に知りたいことには、たどりつかないのではないかとということである。この研究書を越えるには別の視点から切り込まなければならないのではないかと、とまだ出発点にも立っていないうちに生意気にも感じたのである。しかし比叡山の麓の下宿でこのとき感じたこの幽かな感覚が結局これまでの私の研究の方向を決定づけることになったように思う。今から振り返ると、これは芸能史研究の専門的にいう「芸能論」と「環境論」の違いに対応するものである。「芸能論」とは芸能の構造を重視する立場で、「環境論」は芸能が育成した環境を重視する立場である。芸能は演じた瞬間に消えていくものであり、その構造の歴史的変遷を実証的にたどることは難しい。そのため歴史を把握する

確実な方法は「環境論」ということになる。著者は「環境論」の立場から芸能史を構築した大家であったのである。一方、私は「芸能論」にあたる音楽の構造、すなわち実際に鳴り響いた音自体に強い関心があったといえる。

その後、私は3年次より予定どおり日本史を専攻するようになったのであるが、大学院進学にあたって、どうしても音楽自体の研究をしたいという思いを捨てられず、専攻を音楽学へ変え、住居も林屋辰三郎氏の住む京都から東京へ移し、環境論の立場にたつ従来の芸能史研究では十分に活用されてこなかった古楽譜を研究対象に選び、一方では宮内庁楽部の楽師に師事しつつ現行雅楽の構造分析を志すようになった。そして、大学院進学以来『中世芸能史の研究』から離れて十年以上、楽譜研究や実践に没頭した。しかし、自分なりに何となく一つの道が見え、博士論文をまとめ終えたここ数年、再び『中世芸能史の研究』のことが強く思い出されるようになった。すなわち古楽譜の分析で得られた自己の研究成果を、環境論で描かれた芸能史にどのように位置づけられるかを考えるようになったのである。その過程で再び同書を読み直してみると、学生時代には全く分らなかった細部もよく味わえるようになったことに気がつき、また別の楽しみを得ている。

（えんどう・とおる 音楽研究室助教授）



言葉のリズムと往来物

丹 和 浩

近年、素読や暗誦、朗読を勧めたり、その効果を説いたりするような書籍がたいへん流行しました。狂言師野村萬斎の「ややこしや〜」で子どもたちに人気の「日本語であそぼう」も、この流れに沿ったもの(同じ論者による監修)ですね。難しい意味内容を把握させるのは後のことにして、言葉のリズムや響きを身体にしみこませることを先行させるというやり方です。他方、漢字の書き取りや、百マス計算などを十分にやらせて、基礎技能・基礎知識に習熟させることも、特に小学校の現場などでは話題になったようです。最近では、脳の活性化にも有効だということで、大人のための計算ドリルや音読用テキストも出版されています。

このように、身体性を伴って覚えたり、反復習熟して身につけたりする、いわば、「形」から入る教育が見直されているようです。

しかし、振り返ってみると、伝統的な日本の芸道や習い事は、「形」から入ります。江戸時代の初等教育 - 読み書き算盤 - もやはり、「形」の習熟に重きを置いていました。

手習いのお師匠様から「いろは」の手本を書いていただき、幾度も書きます。紙は貴重でしたから、半紙を束ねた手習い用の冊子を墨で真っ黒にするまで使います。さらに筆を水で濡らして黒い紙の上で幾度もなぞって練習しました。十分練習したところで清書してお師匠様に見ていただきます。これを繰り返し、「いろは」や数字から、「名頭字」(人の名前によく使われる文字を集めたもの)、居住地付近の地名など、次第に文字も語彙も増やしていきます。当然、読めなければいけませんから、声に出して読むことも行われましたが、これも覚えてしまうほど何度も読むのが普通だったようです。計算についても、かけ算の「九九」はもちろん、割り算の「八算」なる表も覚えてしまいました。このように、身体にしみこむまで習熟させるやり方が、寺子屋教育の主要な部分を占めていたと考えられます。

この手習い用のテキストとして、江戸時代を中心に数多く出版されたのが「往来物」です。そもそも「往来」とは、往復の書簡の意で、平安時代後期に編まれた『明衡往来』以来手紙のやりとりの形態をとって文字を学ばせるためのテキストでした。後には、

手紙文以外のものも行われ、特に江戸時代には、教訓、地理・歴史、法政、算学から実業的な内容を含むものまで幅広い広がりを見せました。

本学図書館にはこの「往来物」のコレクションがあります。「望月文庫」といわれる特殊文庫がそれで、代表的なものはホームページでも公開されています。

さて、それらの「往来物」を見てみると、唱えて覚え込むのに都合のよいように工夫されているものを見いだすことができます。たとえば『東海道往来』の冒頭部分は、次のように七五調で、しかも「文字鎖」(はな なみ、品川や やがて、と句末の一字を受けて句頭を始める形式、つまり、しりどりのようなものですね)になっています。

都路は 五十餘にみついそしあまりの宿 時得やどて咲や江戸のはな
浪静なみしづかなる品川やがや 頓やがてこえる河崎かわさきの 軒端のきばなら
ぶる神奈川かながわは はや程谷ほどがやのほどもなく くれて戸塚とつか
に宿やどるらん.....

調子よく唱えて五十三次を覚えてしまったことでしょう。仮に実際の地理感覚やその他の意味が分からなくても、唱えて覚えてしまったものはなかなか記憶から消え去りませんから、後に思い合わせて認識を深めることができたわけです。

上の例のみならず、「往来物」には七五調を採用することが少なくありませんでした。七五調は、日本の短詩形文学の伝統に基礎を置くものですが、演劇にも俗謡にも取り入れられるほど日常的なもので、日本語と相性のよい、身体に染みついたリズムでした。このようナリズムは、すでに私たち現代日本人の多くが忘れかけているものかもしれません。

もう一つ例を挙げてみましょう。漢字の学習は現在も苦勞を伴うものですが、定型詩の伝統はありがたいもので、漢字を扁・冠・旁やその他の属性ごとにいくつかまとめて、和歌のリズムに載せて覚えさせようとするものがありました。『小野篁歌字尽』がそれです。

栢かや 栢かしわ 松まつ 杣すぎ 檜ひのき 檜ひやく (百ひゃくはかや白しろきはかしわきみ
はまつひまつ久ひさしきはすぎあふ會あひはひのきよ)

このようなものがたくさん集められています。中にはどれほど実用に供したのか疑いたくなるものもありますが、象形文字の持つ視覚的要素と和歌のリ

ズムを組み合わせた秀逸なもので、江戸時代には広く行われました。



東海道往来 弘化年間 T1A0/41/147



小野篁歌字尽 森屋治兵衛 T1A0/11/53

(たん・かずひろ 附属高等学校大泉校舎教諭)

平成 15 年度 資料展示会・講演会報告

1. 資料展示会・講演会について

附属図書館では、平成 15 年 10 月 30 日から 11 月 4 日までの 6 日間、「江戸時代の教科書 - 往来物展」と題する資料展示会を 1 階閲覧室で開催しました。当館は、師範学校等から受け継いだ望月文庫をはじめとする往来物や教科書を多数所蔵しています。その中から、今回は全国に 1 点あるいは数点しか現存が確認されていない貴重資料を含めて、往来物 102 点、絵双六 10 点を厳選して展示しました。小金井祭に合わせた開催でしたので、学生、教職員のほか多数の一般市民も来館し、手習いに使われたであろう往来物やカラフルな双六に見入っていました。6 日間の会期中の入場者は 717 名でした。

資料展示会に合わせて、10 月 30 日には本学人文科学科歴史学研究室の大石学教授による講演会「江戸時代の文化と教育」を 3 階視聴覚ホールで開催しました。岡本学長(当時) 鷲山現学長、市民を含む 60 名の入場者がありました。ところどころに時代劇の時代考証の話を織り交ぜた、新しい江戸時代像と教育の発達の状況を明らかにした講演は、参加者から頗る好評でした。

2. アンケート結果から見た資料展示会

今回の資料展示会にあたり、入場された方にアンケートをお願いしましたが、158 名の方から回答いただきました。



(展示風景)

「1 この展示会を何で知りましたか？」には、「会場に来て」が 83 名、「ポスター、チラシ」が合わせて 51 名、「看板」が 22 名「人から聞いて」が 20 名、その他、「図書館のホームページ」、「市報」、等の回答がありました。

「2 本学附属図書館に、往来物や双六のコレクションがあることを知っていましたか？」に対しては、「知っていた」方が 37 名、「知らなかった」方が 120 名でした。

「3 今回の展示の中で特に興味をひいたものは何ですか？」に対しては、往来物は 庭訓往来、千字文、英学捷径七ツ以呂波、御成敗式目、新編塵劫記。双六は 女子家庭双六、新版御菓子双六、三十六歌仙双六、東海道五十三駅道中記細見双六、大日本六

十余州一覽双六、忠臣蔵出世双六、の順でした。

「4 展示会全体の感想・ご希望」などの自由記述欄には、104名の方から何らかの感想等を書いていただきました。「日本教育史の勉強で興味をもった往来物の本物を見られて大変よかった。」「内容に現在に通じるものがあり、時代がかわってもずっとうけつがれているものがあるのだと改めて感じました。」「ぜひ他の物でも展示を開いて欲しい。」「双六の色彩にびっくりしました。」などと好意的な感想が多く寄せられました。

「5あなたのご所属」は学内の方が71名、学外の方が80名、卒業生と明記された方が4名でした。学外の方のお住まいは、小金井市が16名、小金井市も含め多摩地区の方が37名、都区内の方が18名、都外の方が25名でした。

3. 講演「江戸時代の文化と教育」概要

「江戸時代の教科書 - 往来物展」によせて

往来物とは、平安時代末期（11世紀後半）以後、明治初年（19世紀後半）に至るまで、約800年にわたり広く使われた書簡文体の初等教科書の総称である。往来とは、それらが往返一対の消息文集の形態を有していたことから名づけられた。江戸時代には、寺子屋の普及、庶民教育の発達に伴い、地理・歴史・産業・経済など、さまざまな分野の日常的な知識を、書簡形式で、文字とともに庶民に教えるさいの教材として使用された。

江戸時代は「庶民教育の時代」、「教育爆発の時代」ともいわれる。どうしてこのような時代が生まれたのだろうか。

はじめに - 江戸時代像の変化 -

江戸時代というと、現代からは遠い時代・断絶した時代とみられてきた。しかし近年こうした江戸時代像が変ってきている。江戸時代はわれわれの時代と連続する時代・地続きの時代として見るほうがよい、という考え方である。

「平和」の到来と文字社会（江戸時代前期）

16世紀末、列島社会は戦国時代が終わり、豊臣秀吉の「惣無事」政策と、それを引き継ぐ徳川氏により「平和」の時代（Pax Tokugawana）へと移行した。兵農分離政策により、武士は城下町に集住し官僚化する一方、農民は村落自治を展開することになった。遠隔地からの支配・行政は文書にもとづくものとなり、武士・農民ともに知識や教養を重視するようになった。また、経済活動が活発化し、商人や職



（講演する大石教授）

人の間でも教育への関心が高まった。

将軍吉宗の教育政策（江戸時代中期）

8代将軍吉宗の享保改革（1716～45）は、いわば「大きな政府」をめざす政治であった。政治権力の国家的集中・統合が行われ、江戸の首都機能強化、官僚主義、規制強化が進んだ。そして社会の安定化、国家権力の社会への浸透がはかられ、庶民を視野に入れた教育政策が展開された。

法や官僚機構が整備され、それを支える公文書システムが広まった。

都市や農村においてもいっそう文書主義が浸透した。

国民教育の普及と文化の発達（江戸時代後期）

江戸時代後期には、教育の普及が加速化した。寺子屋や私塾が増加し、地域や身分をこえて国民的文化が形成された。

当時来日した外国人のさまざまな文献からも、当時の教育の発達ぶりが知られる。

江戸時代を通じて国民諸階層の教育制度が整備され、社会の近代化・均質化が進み、これが明治からの公教育制度の重要な前提となったのである。

展示会および講演の詳細は、附属図書館ホームページ「展示会アーカイブ」でご覧いただけます。

展示資料の簡単な解説付きの一覧や、往来物カラー画像27点、白黒画像56点、双六カラー画像10点などを掲載しています。

（URL http://library.u-gakugei.ac.jp/lbhome/tenjikai/tenjikai_H15.html）

今回の展示会にあたり、往来物研究者の小泉吉永氏に多数ご助言いただきました。ここに記して謝意を表します。

- 資料探しの基本ツール -

学芸大OPACを 活用しよう！

学芸大OPACって何？

学芸大OPAC(がくげいだいおぱく)は東京学芸大学附属図書館の蔵書目録データベースです。OPACとは、One Public Access Catalog の略で、一般公開されている、誰もが利用できる蔵書目録データベースのことです。

どんなときに使うの？

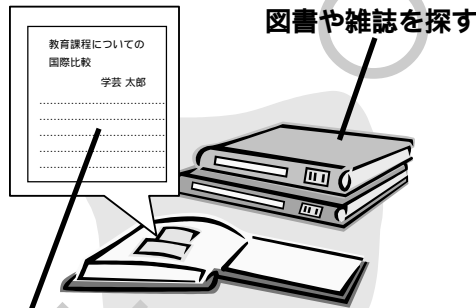
学芸大OPACは、読みたい図書や雑誌、視聴覚資料が学内のどこにあるかを調べるためのデータベースです。附属図書館の資料は膨大にあります。読みたい資料が出てきたら、まず学芸大OPACを検索して、附属図書館にあるかどうかを調べてみましょう！

どこで使えるの？

インターネットに接続できるパソコンからどなたでも、どこからでも利用することができます。携帯電話から携帯版附属図書館ホームページ (<http://library.u-gakugei.ac.jp/i/>) を通して利用することもできます。

× よくあるまちがい ×

学芸大OPACでは論文や記事は探せません。論文や記事のタイトルなどを入力して検索しても有効な情報は得られません。

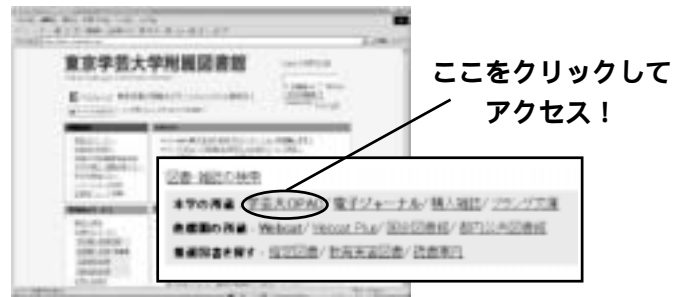


論文や記事を探す

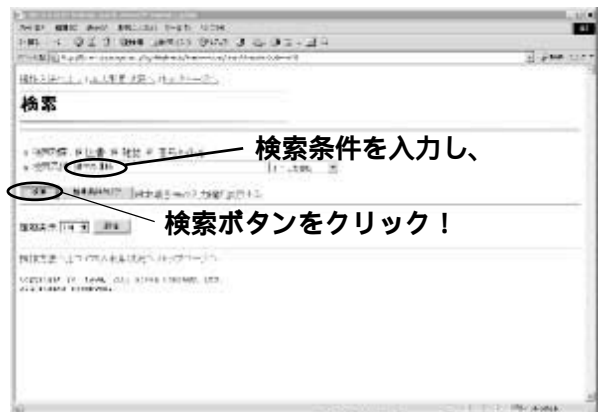
OPACには、冊子の単位でデータが登録されているため、冊子の中に収められている論文や記事の単位では検索ができないのです。

使い方

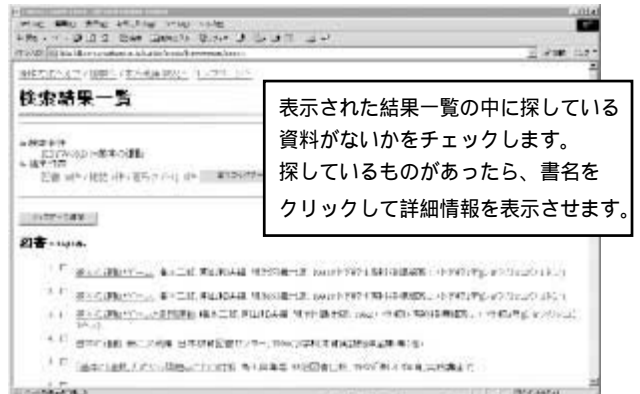
学芸大OPACにアクセスします



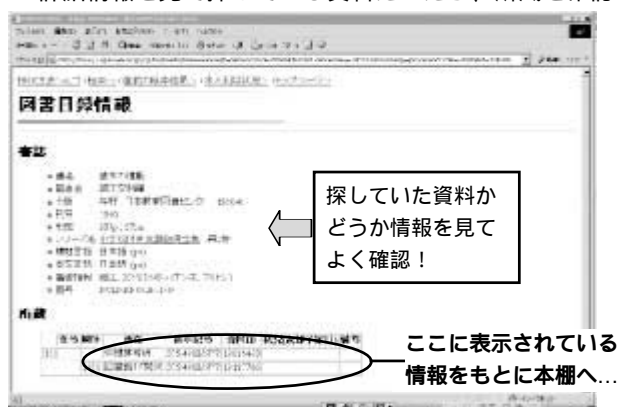
検索条件を入力し、検索ボタンをクリックします



資料の種類別に検索結果が一覧表示されます



詳細情報を見て探している資料だったら、所蔵を確認！



(情報サービス課 参考調査係)



学生の方もホームページから文献複写・資料借受 申込みができるようになりました！

平成16年3月から、教職員に限らず、学生の方も図書館のホームページから文献複写・図書借受の申込みができるようになりました。附属図書館のホームページにアクセスできれば、学外からも申し込みが可能です。

このサービスを利用するためには、図書館への利用者登録と情報処理センターのアカウントを持っていることが必要になります。それぞれ手続きが済んでいない場合は、利用できません。情報処理センターでユーザ名・パスワードの発行を受けた後、図書館へユーザ名をお知らせください。

詳しくは附属図書館のホームページをご覧ください。



附属図書館 各種申込みサービスのページ
(URL <http://library.u-gakugei.ac.jp/req/req.html>)

問い合わせ先：情報サービス課 相互利用係（内線 7224）

館内でノートパソコンが使えます！

附属図書館ではノートパソコン利用環境を整備し、より快適にご利用いただけるようになりました。館内資料と共に、ぜひご活用ください。なお、ご利用には情報処理センターの利用者登録が必要です（学内者限定）。また、学習・研究目的の利用に限らせていただきます。詳しくは、附属図書館ホームページ掲載の「図書館内でのノートパソコン利用について（URL <http://library.u-gakugei.ac.jp/notepc.html>）」をご覧ください。

ご自分のノートパソコンで...

インターネットへの接続について：

無線LANおよび情報コンセント(要LANケーブル持参)で接続できます。

プリンタの利用について：

1階新聞閲覧室内のオンデマンドプリンタが利用できます。

利用のまえに・・・

- ・館内利用のための各種設定が必要です。詳しくは、情報処理センターホームページの「マニュアル集」を参照ください。
- ・ウィルス対策や盗難には、十分注意してください。
- ・図書館内の電源は、数に限りがありますのでご了承ください。

館内貸出のノートパソコンで...

インターネットへの接続について：

無線LANで接続できます。

館内貸出ノートパソコンについて：

- ・OSはWindows-XPのA4サイズノートパソコンです。
- ・希望によりCD-ROMドライブを併せて貸し出します。
- ・Office等の汎用ソフトが使えます。
- ・データは各自FD等に保存してください。
- ・オンデマンドプリンタは利用できません。
- ・館外へは持ち出しできません。

ノートパソコン貸出窓口は？

貸出の手続きは
1階貸出カウンターで行います。

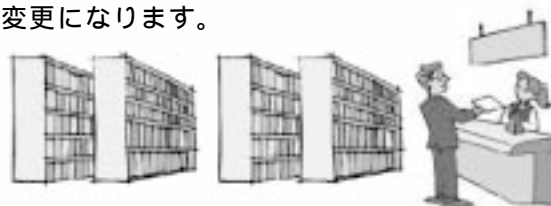




平成 16 年 4 月から係の名称が一部変更になります！

平成 16 年 4 月から附属図書館の係名が次の通り一部変更になります。

* 旧名称 *	* 新名称 *
収 書 係	学術資料係
目録情報係	電子情報係
閱 覧 係	資料サービス係



スタッフ一同、さらなるサービスや利用環境の充実を目指していきます。図書館をお使いいただく上でご不明な点などございましたら、お気軽にお問い合わせください。どうぞよろしくお願いいたします。

お問い合わせ内容	担当係名	電話番号 メールアドレス
図書館の物品管理・庶務、AVホールの利用、 『東京学芸大学紀要』の発行・送付	総務係	042-329-7219 tosyokan@u-gakugei.ac.jp
図書・雑誌・電子ジャーナルの購入（学内限定）、 図書の寄贈、蔵書目録の作成	学術情報係	042-329-7220 libuke@u-gakugei.ac.jp
OPAC や E-TOPIA のデータ、 電子ジャーナルの利用環境整備、 附属図書館ホームページ、メールニュース	電子情報係	042-329-7221 libcat@u-gakugei.ac.jp
資料の貸出・返却/ 図書の予約、 書庫の利用、本学学位論文の閲覧、 視聴覚資料・ノートPCの館内貸出（学内限定）、 共同学習室の利用、館内での忘れ物	資料サービス係	042-329-7225 etsuran@u-gakugei.ac.jp
図書館の利用案内、図書館で実施する講習会、 OPAC・各種データベースの検索方法、 資料の所在調査、特殊文庫・マイクロ資料の利用	参考調査係	042-329-7223 libref@u-gakugei.ac.jp
図書館での文献の複写、 学外機関所蔵資料の複写、取り寄せ（図書）、 学外機関利用のための紹介状発行	相互利用係	042-329-7224 libill@u-gakugei.ac.jp

図書館カウンターを統合しました！！

このたび、附属図書館では1・2階のカウンターを統合しました。

今後は1階の貸出カウンターおよびレファレンスデスクで次のとおりすべてのサービスが利用できます。

貸出カウンター：資料（図書・雑誌）の貸出・返却
利用者登録
書庫の利用、本学学位論文の閲覧
視聴覚資料・ノートパソコンの館内貸出（学内限定）
共同学習室の利用、館内での忘れ物の問い合わせ

レファレンスデスク：図書館の利用案内、図書館で実施する講習会
OPAC・各種データベースの検索方法
資料の所在調査、図書館での文献の複写
特殊文庫・マイクロ資料の利用
学外機関所蔵資料の複写、取り寄せ（図書）
学外機関利用のための紹介状発行

平成 16 年度附属図書館 講習会スケジュール

附属図書館ではみなさんの学習・研究活動を支援するために、平成 16 年度も各種メニューを取り揃えて講習会を開催します。

みなさんの参加をお待ちしています!!

新入生のための図書館オリエンテーション

4月12日(月)～16日(金)までの5日間、下表のスケジュールで実施します。

	10:30～	14:30～	16:10～	18:00～
4月12日(月)	○	○	○	○
4月13日(火)		○	○	
4月14日(水)	○	○		
4月15日(木)		○	○	○
4月16日(金)			○	

図書館内を回りながら、資料の配置場所や利用方法について40分程度でご案内します。書庫の利用方法もご説明します。

新入生をはじめ、「附属図書館のことをもっと知りたい...」というあなたの参加をお待ちしています。

1階正面のらせん階段の前に集合しましょう!

電子ジャーナル講習会

前期は5月中旬～6月、後期は10月～11月に開催予定です。本学で利用できる電子ジャーナルについて、データベース別に数回に分けて実施します。各回とも利用のための基本的事項や検索方法などを実習を交えながら説明します。内容や参加方法などについては随時図書館のホームページでお知らせしていきます。

問い合わせ先(書庫利用講習会を除く)

情報サービス課 参考調査係(1階レファレンスデスク)

TEL: 042-329-7223 / E-mail: libref@u-gakugei.ac.jp

文献の探し方オリエンテーション

OPAC、Webcat、雑誌記事索引の利用法を中心に、文献の探し方・入手方法の基礎について実習を交えながら説明します。

- ・実施日程: <前期> 5月11日(火)～7月16日(金)
<後期> 10月26日(火)～11月26日(金)
各回10時30分から60分程度です
月曜日、土・日祝日を除き実施します。
- ・参加方法: 参加は予約制です。附属図書館レファレンスデスクに申し込んでください。

書庫利用講習会

書庫利用の手続、書庫内配置の概要、電動書架の操作方法、利用のマナーや非常時の対応について説明します。予約制により、平日10:00～10:15、16:15～16:30に開催します。

- ・問い合わせ先: 情報サービス課 資料サービス係
(1階貸出カウンター)
TEL: 042-329-7225
E-mail: etsuran@u-gakugei.ac.jp



講習会の情報は、ホームページからもお知らせしています。
<http://library.u-gakugei.ac.jp/seminar/seminar.html>

図書館の利用マナー

Appropriate Behaviour

図書館は私たちの共有財産です。図書館を気持ちよく利用できる環境づくりにご協力ください。

利用した資料はもとの場所に返しましょう
After use, please return materials to their original place.

携帯電話は電源を切りましょう
Please turn off your cellular phone.

館内での飲食や喫煙は禁止です
Eating, drinking or smoking inside the library is not allowed.

館内では静かに
In the library, we ask for silence.

貴重品は常に携帯しましょう
Please watch your valuables. (The Library can not be responsible in the case of theft!)